第３０期新潟市社会教育委員会議

実施年月日	第６回　　平成２５年６月２７日（木）実施		
会　　場	市役所 白山浦庁舎１号棟２階会議室	傍聴人	１人
会 議 内 容	１．開会 ２．教育次長あいさつ ３．報告事項 （１）　平成２５年度指定都市社会教育委員連絡協議会について （２）　国の第２期教育振興基本計画（概要）について ４．協議事項 （１）　各種研究大会への参加について （２）　会議開催日程と今後のスケジュール及び小委員会設置について （３）　社会活動の実践事例から考える 「学習活動を社会活動につなげていくためにはどのような支援が必要か」 ５．その他 ６．閉会		
出　席　者	【社会教育委員】 相庭和彦　　宇賀田規恵　　川上光子　　雲尾周 齊川豊　　佐藤貞子　　中村恵子　　長谷川克弥 【事務局】 斎藤教育次長　　三保生涯学習センター所長　　鈴木課長（生涯学習課） 高橋館長（中央公民館）　　河内課長（地域と学校ふれあい推進課） 伊藤課長補佐（生涯学習課）　　原係長　　相崎主査		

会　議　録

１．開会

（司　会）

これより第30期新潟市社会教育委員会議第６回を開催いたします。

開会に当たりまして、斎藤教育次長より一言ごあいさつを申し上げます。

２．教育次長あいさつ

（斎藤教育次長あいさつ）

（事務局自己紹介）

（資料確認）

では、ここからは、相庭議長に進行をお願いしたいと思います。

（相庭議長）

それでは、お願いいたします。

まず、本日の出席についてご報告をいただきたいと思います。

（事務局）

本日は、原委員、松木委員、長谷川美香委員から欠席のご連絡をいただいております。新潟市社会教育委員の会議運営規則第９条に定める開催に必要な人数を満たすということをご報告します。

また、本日の会議につきまして、傍聴の定員を５人として周知したところ、お一人、傍聴のご希望がありましたことを報告します。以上です。

（相庭議長）

それでは、お手元の第６回次第に従いまして、順に進めていきたいと思います。

３．報告事項

（１）平成 25 年度指定都市社会教育委員連絡協議会について

5 月 31 日にホテルオークラで新潟市主催の平成 25 年度指定都市社会教育連絡協議会が開催され、6 人の委員が参加されました。第 1 分科会は、私と長谷川美香委員、第２分科会には、雲尾副議長と中村委員、長谷川克弥委員、原委員に出席していただきました。

さっそく、参加報告をしていただきたいと思います。本来であれば参加者全員から報告いただくところですが、時間の都合上、議長を務めました私と雲尾副議長を除く方から発表いただく予定ということだったのですけれども、長谷川美香委員が欠席なので、私が長谷川美香委員の代わりをするということになって、次に中村委員、そして長谷川克弥委員のほうにお願いしたいということになります。

さっそくですが、長谷川美香委員が作ってくれた資料が、お手元にいっていると思います。少しご覧ください。

分科会形式、元々はひとつの会で話をするといっていたのですけれども、政令指定都市が多くなって、集中的な話ができなくなったので、新潟方式ということで思い切って変えました。分科会形式を取って、その後、全体会で報告するという、そういう報告の形式を取って、初めての試みなのですがやってみました。手前味噌ですが、非常に評判がよかったです。特に、事務局のご協力を得て、生涯学習課の鈴木課長はじめ皆さんが一生懸命に頑張ってくれたために、私の個人的な知り合いの先生たち、あるいは他の委員の先生方から、新潟方式はいいなと、そして最後は、来年は浜松ですか、これはハードルが高くなったなというお話でした。もちろん、もう少したくさん議論できればなというところもなくはなかったのですが、初めての試みとしては 100 点満点だろうと、私は思っています。まず、全体の反省はこのくらいで、少し見てください。

私の分科会が第１分科会、雲尾副議長の分科会が第２分科会という形でやりました。

第１分科会のテーマは、「知の循環型社会」実現へ向けて社会教育委員がどう取り組むかということで提案がなされました。いくつか話があったのですけれども、結局、非常に問題になるのが、学んだ成果を活用するということをいって、いろいろと地域の人材を発掘するのはいいのですけれども、それと、実際に活用する場がミスマッチを起こしていると。これはどうなのだろうかという議論が随分とありました。登録制度を作ってやるのですけれども、それが、うまくその人と地域の必要とする場とがマッチングできないだろうかと。そこのところに情報交換できないだろうかということが随分と出ていたのですが、いくつかの例が出されて、コミュニティ市場、市場のようなものを作って、市民が自ら働いて、動いて、そしてそこに集まった人が集団での市場みたいな形でブースを作って、回って歩いて、自分たちがやるところはここがいい、あそこがいいというので、そして人を選んでいくような形を取ったらどうだろうかとかということも出ました。

それから、もう１つは、少しこれも議論になったのですけれども、市民講師というものとか、地域コーディネーター、ファシリテーターについてなのですけれども、子どもを教えているような、学校の先生とかのような教育の現場での経験者が多いと。小・中の先生が。そうすると、子どもを教えるように市民に対して接するというような態度、姿勢、あるいはそういう方法、教育技術というものを持っている人が多いので、そうすると、うまいこと市民講座やコーディネーターになってもらったのはいいのだけれど、その人に理解してもらうほうが、時間が掛かって骨が折れると。この辺は何とかならないのかということが。新潟市ではありませんからね。間違わないでください。そういうことが出てきたということです。それについて、教える技術というものが必要だということが埼玉から出されたのですが、神戸の方は、社会教育というのは相互学習関係であると。だから、教える技術というものをつくって、そして教えるということを前に出すのは、社会教育の基本的な方法からはいかがなものかというようなことで話が出ました。私は、面白い話だから、ぜひ、議論激突でガンガンやらせようかと思ったのですが、もう時間がなくて、はい、そこまでということで。そういう感じで終わってしまいました。ただ、大変面白かったのは、長谷川美香さんのほうから、

やはりコーディネーターというのは、ある程度の技術があって市民に慣れていないと難しいのではないかというご提案がなされたり、あるいは神戸のほうからは、やはり教えるぞと入ってきても、早く帰ってくれないかなと思う人が教わる側にいるから、うまくいかないと。なので、そんな簡単にできるものではないということで長い目で見て、お互いに成長していくのだというくらいの気構えがいるのではないかということが、神戸、浜松の考えで、埼玉の考えは、やはりそうは言ってもねと、すぐに使えるような人が必要なのだということで話が終わりました。深められたらよかったかなと、少し時間的に苦しかったのですが、大変楽しい会議でした。

その次が、「社会に活かせる学習」を意識してもらうための方策ということで、先ほど言いましたが、社会教育としては、指導者養成というのは何なのかということをもう少しお互いに深めていったところで講座というものが生まれてくるような、そういう方向性がないものだろうかといって出てきました。市民教育は、市民を育てるということを意識していくということが大事で、そこに社会教育、生涯学習としての重要な点があるのだと言われるのですが、では、指導者養成、社会教育の指導者というのは、どういう素質があるのだろうということを、もう一回検証し直す必要があるのではないかということが私の感想です。

以上が、私たちの「知の循環型社会実現に向けての取り組み」でした。

続きまして、中村委員のほうからお願いできますか。

（中村委員）

私どもは、午後の協議会からの参加になりました。分科会２「家庭と地域の向上について」というところで参加させていただきました。

前半のほうなのですが、提案協議題ということで、４つの提案の市から提案していただいて、それについて、いくつかの、２つとか１つとかの市から回答をいただくという形で前半は進みました。そこにあるように、人づくりであるとか、コミュニティづくり、それから親への支援とか、そのようなことが回答として挙げられていて、私個人的には、北九州の企業人による小学校応援団、親学支援というものがいいなと思って聞かせていただきました。この各４つの提案協議題について、みらいず works さんのほうからファシリテーション・グラフィックにまとめていただきまして、視覚化していただいたということが非常によくて、後から写真を撮っていらっしゃる人がたくさんいらっしゃいました。

それから後半のほうなのですが、統一協議題ということで、ここにあるような議題で話をしました。まず、紙に一人ずつ、それについてどういう取り組みをするかということを少し書いて、袋の中に入れて、それを当てられた人から何人か発表していただいてという形で、少し場をほぐした後に意見が出され、最後に小グループで話し合うというような形で、そしてそれをグラフィックでまとめていただいてので、非常に見ていてああという感じて、非常に興味ある形で見られた方がたくさんいらっしゃったのではないかなと思いました。

私のほうは、すっかりファシリテーション・グラフィックがあるからということで、それで安心して少しもメモを取らなかったのですけれど、写真を撮っておけばよかったなと思って、写真を撮っておけば、これを５枚貼って報告書ができたなと後から悔やまれましたが、内容については、雲尾委員から丁寧に書いていただいたので、そちらのほうをご覧いただければなと思います。

ファシリテーション・グラフィック、みんなで協議する、参加するという形の形態を取ったということが非常によかったなと思いました。最後に、それぞれの感想をと言ったら、みらいず works さんはどんな活動をされているのですかみたいな逆質問で終わって、それだけ興味のある形だったのかなと。そういう意味で、分科会というものも非常に提案性がありましたし、ファシリテーション・グラフィックというものも非常に提案性があり、参加したという感がある協議会になってよかったなと思いました。以上です。

（相庭議長）

ありがとうございました。それでは、長谷川委員、よろしくお願いします。

（長谷川（克）委員）

私も、雲尾副議長の分科会に参加させていただきました。内容は、中村先生がご報告されたとおりです。私自身は、初めての参加で、他所開催の協議会との比較評価はできませんが、こういった会の趣旨は、参加者個々が持っている問題をクリアにして、その疑問に意見交換をして、各々がモチベーションを高めたり、事業の活性化を図ることだと思っています。そういった意味合いで、今回の協議会は、非常にいい会だったと思いました。

今回は、皆さんの発言を視覚化するファシリテーション・グラフィックという手法を「みらいずworks」さんが上手に実施されました。参加型で多数の意見をわかりやすくまとめるという手法で、この手の協議会においては、大成功だったと思います。おそらく新しい試みだったと思いますが、この手法は、スキルを要する手法なので、今後の開催地にとっては、少しハードルが高い内容にも思えました。今後の開催地において参加型でこのように高度な運営スキルを要しない手法としては、分科会の数を増やし、10 人とか 12 人程度の少人数による分科会方式も考えられます。この方法では、達成感と意見交換は密になりやすいですが、分科会の数が増しただけ、共同認識のあり方というものには課題が残るかもしれません。今回の協議会参加だけでは、その辺は比較できないので何とも言えませんが、参加意識は、例年より非常に高く好評だったように感じましたし、活性化した会ではないかなと思っていました。以上です。

（相庭議長）

ありがとうございます。今回は初めてのケースだったので、どういう形で浜松さんが引き継いでくれるかと楽しみであります。特に、片や徹底討論性で、片やワークショップ形式で、まったく違った分科会の形式を取って、テーマも違うということで、大変面白かったと思います。ご参加いただいた先生方、ありがとうございました。

（２）国の第２期教育振興基本計画（概要）について

それでは、事務局お願いします。

（生涯学習課長）

それでは、（２）の部分につきまして、若干ご説明させていただきます。資料の１で、本当に概要の部分だけお渡ししてあります。国は、教育基本法第 17 条第１項に基づいて教育振興基本計画を策定しておりますが、このたび、平成 25 年度から平成 29 年度を計画期間とする第２期の教育振興基本計画を策定いたしましたので、今回、その概要ということで配布させていただきました。この計画につきましては、平成 25 年４月 25 日に出された中央教育審議会の答申を受けまして国が策定し、６月の 17 日に閣議決定されたものです。本日、国のほうで、この説明会が開かれているような状況です。つきましては、今、そういう状況であるということで、今回は、本当に速報というような形での概要版のご提出ということになりました。本文につきましては、また改めて配布させていただくことにいたしまして、このような計画が今策定されましたということで、皆様にお知らせしたいということで、この概要版のほうを配布させていただきました。

国のほうは、今回、計画のポイントということで３つほど挙げておりまして、１つ目は、少子化や高齢化、グローバル化といった国が直面する危機的な状況を踏まえて、将来の社会のあるべき姿を描きつつ、その実現に必要な施策を体系的に整理しましたということ。それから２つ目としては、小中高など、各学校間ですとか、あるいは学校教育と職業生活などの円滑な接続という辺りを重視して社会を生き抜く力を養成するなど、生涯の各段階を通じた教育の方向性を掲げましたということ。それから３つ目として、検証や改善のサイクルを実現するために、第１期計画ではなかなか十分ではなかった成果目標ですとか、指標といったものをできる限り明確に挙げましたということで紹介がありました。

これにつきましては、また本文でご確認ということになるのですけれども、計画自体は１部と２部の構成になっておりまして、１部が総論、２部が各論となっております。裏面が２部になっておりますけれども、１部のほうで見ますと、下段の左下に国の状況ということで、少子化、高齢化、あるいはグローバル化、雇用環境の変容、地域社会、家族の変容、格差の再生産・固定化といった

今の国の状況を挙げた上で、これを回避するための社会の方向性としては、その右下の囲みにあるように、自立した個人が多様な個性や能力を活かして、他者と協力しながら新たな価値を創造していくことができる社会。自立・協働・創造の実現に向けた生涯学習社会の構築を目指すとしています。そのための教育行政の方向性ということで、上段にいきまして、４つの基本的方向性を示しています。社会を生き抜く力の養成。それから、未来への飛躍を実現する人材の養成。そして学びのセーフティネットの構築。絆づくりと活力あるコミュニティの形成というような形の４つの方向性で施策を進めていきますということになっています。

そして、それが裏面にいきますと、それぞれのところに、ここでは成果目標とかがはっきり見えないのですけれども、さらに体系図があります。こうした４つの基本の方向に向けて成果目標を、例えば１の「社会を生き抜く力の養成」であれば、４つの成果目標を設けた上で、それぞれ基本施策となるものを入れて、さらに具体的に取り組みをしてきますという形で、計画は作られているという状況になっております。

「社会を生き抜く力」というところでは、幼稚園から高校までの中でその生きる力の確実な育成を図り、大学以降で課題探求能力の修得をし、社会全体としては自立・協働・創造に向けた力の修得をしていくということを、生涯の各期において進めていきますという形の計画になっています。

なお、新潟市におきましては、教育ビジョンという形で作っておりますので、こういったものを踏まえながら、今後、見直しを図っていくことになるかと思っております。簡単でございますけれども、以上でございます。

（相庭議長）

ありがとうございました。社会を取り巻く危機的状況というものが随分と前に出てきましたね。

それでは、何か、ご質問はありませんでしょうか。

では、私のほうから少し。教育基本計画で、結構、学びのセーフティネットとか、未来への飛躍を実現する人材養成とか、ここで出てきているじゃないですか。具体的に、学びのセーフティネットの構築は、新潟市で持っている、今後考えているというプランとかはあるのですか。これをどう作るかというような。まだ、全然出ていないですか。

（生涯学習課長）

そうですね。国では経済的な部分の支援というものと、それから、例えば困難を抱えた子ども、若者への支援、学び直しの学習機会の提供・充実、そういうような形のものが出ています。あとは、もう少し広くて安心・安全な教育環境というようなところで耐震化など、施設面の部分、環境整備という部分があります。国のそういった具体的なものを見ていくと、今も新潟市としてやっているものもありますけれども、本当にセーフティネットになるような施策ということになりますと、もっと拡充するなり充実するなりという作業が必要になると思います。

（相庭議長）

多分、作ることになるのでしょうね。

もう１つは、結構、グローバル人材と言っているのだけれども、新潟市というは、中高生の留学資金とか、基金とかというものはあるのですか。

（生涯学習課長）

市としてはないです。

（相庭議長）

思い切って50人くらい募集して、それで、募集した人間たちから選抜して、１年くらい留学させたらどうですか。

（生涯学習課長）

交流を中心にした海外派遣のようなものはありますけれども、留学という形での支援はございません。

（相庭議長）

半年留学くらい、９月から３月くらいまで行ってきなさいといって、それで募集すれば集まるの

ではないですか。各国ごとに、フランス５名とか。例えば、友好姉妹都市はハルビンとかたくさん持っていますよね。５名ずつ挙げて、40名くらい募集して、中学校、高校から行きたい人、手を挙げろと。あとは、面接をやって、学力関係なして、意欲のある人間からどんどん出て行ってもらうと。そういうシステムを持ってみたら面白いかなと思いますね。人に投資するということについての躊躇が行政のほうに少しあるみたいで、だから、箱モノを作ることについてはすぐに手を打つのですけれども、子どもたちや青年たちの一人一人の可能性とか希望とかというものに対しての直接的教育投資というものが、どうしても足踏みする傾向が多いと思うのです。そういう意味では、社会教育から見ると、思い切ってやってもらったほうがいいのではないかなと思います。

４．協議事項

（１）各種研究大会への参加について

事務局からよろしくお願いします。

（資料２について説明）

（相庭議長）

ありがとうございました。選出をしなければなりません。参加希望をとっていきたいと思うのですが、１回目の政令指定都市の５月 31 日はすでに終わりました。55 回全国社会教育研究大会は、今の話だと私が行くということですね。

関東甲信越静の社会教育研究大会は、来年度の神奈川大会は、私たちが分科会を持たなければいけないのですね。

覚悟を決めてというお話でございますが、どなたか、いかがでしょうか。

これは、雲尾さんですね。

（雲尾委員）

私は 15 日は青森だからだめです。

（相庭議長）

そうですか。いかがでしょうか。どなたか。

（事務局）

それでは、詳しい要項がまいりましたらご案内いたしまして、個別に打診をさせていただくことにいたします。

（相庭議長）

それでは、事務局のほうから個別に打診があるそうですので、打診された方は、心の準備をよろしくお願いいたします。

（２）会議開催日程と今後のスケジュール及び小委員会設置について

事務局より説明があるそうです。

（事務局）

（資料２について説明）

それから資料３をご覧いただきたいと思います。今ほど申し上げましたように、定例会議としては８月、10 月、１月、３月と、４回、今後予定しております。この４回の中で、まず次回につきましては、今行っております市民意識調査の速報結果が出てくる予定でおりますので、その辺につきまして説明をさせていただきたいと思っています。それから、第８回、９回、10 回と、この３回で、今期のまとめといいますか、本市の「生涯学習の今後の方向性について」を報告書でまとめていくという作業がございます。定例会は限られた回数ですので、こちらとしては小委員会を設置させていただきたいと思っております。人選につきましては、また次回の会議でお諮りしたいと思ってい

ますが、小委員会としては、予定ではありますが、この表の中ほどにありますように４回ほど予定しております。

それから、一番下のところに市民意識調査ということです。一応、締め切ったのですが、まだ若干調査票が戻ってきております。前期で行った「地域の教育の向上に関する調査」に比べまして、少し回収率が芳しくない状況です。この市民調査につきましても、調査結果の分析といいますか、傾向につきまして、また社会教育委員の、前回ですと議長、副議長という形だったのですが、またそのような形で、その分析、傾向のまとめをお願いしようと思っていますので、その辺についてもよろしくお願いいたします。以上です。

（相庭議長）

ただ今の説明について、ご意見、ご質問等はございませんでしょうか。

では、少し私のほうから。回収率が悪いと、そんなにひどいのですか。

（事務局）

35.7 です。

（相庭議長）

それは低いですね。分かりました。時期的にまずかったのでしょうか。

（事務局）

時期的というか、調査会社が言うには、やや厚さがあったらしいですね。また、生涯学習ということが少し前に出てしまっていて、敬遠されたのではないかという意見もありました。

（相庭議長）

生涯学習が前に出たから敬遠されたのですか。

（事務局）

そういうような調査会社の方のご意見がありました。

（相庭議長）

それは、非常に残念なことですね。

ほかにいかがでしょうか。

（佐藤委員）

このアンケートは、このメンバーの方々の皆さん、送られていてはいないのですか。

（事務局）

いきましたか。3,000 人に選ばれたのですね。

（佐藤委員）

当たりました。

（相庭議長）

それは珍しいですね。

（佐藤委員）

皆さんに送られたのかなと思いながら。

（相庭議長）

それは珍しいですね。無作為抽出でいきますので。

（佐藤委員）

そう聞いていたのですけれど、あれ、家に来ていると。

（相庭議長）

すごいですね。私などは新潟市に長いですけれども、１回も当たったことはないですよ。

ほかにいかがでしょうか。

小委員会のほう、それからメンバーの選出等につきましては、８月の 27 日でいいですよね。

それから、７回、８回、９回、10 回、日程がここに出ましたので、委員の先生方、お忙しいとは思いますが、よろしく、空けておいてご参集お願いいたします。

（３）社会活動の実践事例から考える

「学習活動を社会活動につなげていくためにはどのような支援が必要か」

まず、事務局からこれについてご説明をお願いします。

（生涯学習課長）

皆様方には、メールでのご連絡になってしまいまして大変申し訳なかったのですけれども、お願いさせていただいたところでございます。今ほど、今年度のスケジュールを決めていただきましたように、今年度中に生涯学習の方向性ということでまとめていただくような状況がございます。昨年度は、調査の項目をまとめていただくなど、いろいろとしてきた中で、テーマのひとつでもあったのですけれども、学習活動を社会活動に繋げていくということを、どのような形でやっていくことが循環型になるのかということを少し意見交換していただけないかと思っています。これについては、社会教育委員連絡協議会の第１分科会のテーマでもありましたし、私どもの生涯学習推進基本計画、それから、今ほどの国の第２期の教育振興基本計画といったものの中でも大きなテーマになっていると思っておりますので、今後まとめていく前段として、今、委員の皆様方はいろいろな活動をされていらっしゃる方が多いと思いますので、特に今回は市民活動をされていらっしゃる委員さんを中心に、そういった事例を通してこのテーマについてどのようにお考えになられるかという辺りを少しお話していただいた上で、皆様方から意見交換していただけないかと思いましてこの議題を上げさせていただきました。時間のない中でのお願いになってしまいまして大変恐縮なのですけれども、ぜひ、伺わせていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。以上でございます。

（相庭議長）

それでは、４人の発表者がいらっしゃいますので、前半をお二人、およそ一人５分ほどのお話をいただきまして、そして、そのご発表につきまして、５分ほど意見交換・質疑ということで、次に残りのお二人から発表をいただきまして、また質疑と。そして最後に全体として意見交換をするという形で全体を運んでいきたいと思います。

それでは、最初に宇賀田委員のほうからお願いします。

（宇賀田委員）

日ごろ、社会教育活動を行っている社会教育委員の皆様へということで、少しドキッとしてしまいましたけれども、こちらにお世話になっている立場が豊栄地区公民館運営審議会委員として、また、それに加えて地域のほうでは民生委員・児童委員を務めております。そういった関係から、学校のほうの学習支援ボランティアも、お声掛けをいただいたときに参加して活動をさせていただいております。事務局のほうからいただいた資料に基づいてお話をさせていただきます。

活動を始めたきっかけはということなのですが、もう20数年前ですけれども、大元をたどれば、やはりＰＴＡ活動だったのではないかなと思っております。子どもが２人おりまして、通算４年間、小学校、中学校でＰＴＡの役員を務めました。最初はどちらかというと、私、人前に出るのが非常に苦手で絶対に嫌だと断っていたのですけれども、結局じゃんけんで負けたりして活動が始まったわけなのですけれども、結局、私は県外の出身なものですから、本当に仲間づくりのいいきっかけになったということで、それは大きな財産として今も生かされているように思います。

そのＰＴＡ仲間と一緒に、いい仲間ができましたので、今度は地域のイベントなどのボランティアにスタッフとして参加するようになって、いろいろなミーティングを通して何かを作り上げていくというような喜びみたいなものを感じるようになりまして、そこから業者の方ももちろん、商店街の方、あるいは福祉関係の方、いろいろな方と知り合いになりまして、結果、いろいろな分野の方からいろいろな役目を頂戴して、ほんのつまみ食い程度なのですけれども、いろいろなところで活動をさせていただいたということがきっかけではないかなと思っております。

活動をしてみて感じることなのですが、今も申し上げたとおり、仲間づくりができたことというのがやはり一番大きくて、私にとっては、知らない土地で安心して暮らせるという、すごくいい土台作りができたように思います。その仲間のおかげで情報量というものが非常に増えまして、また、

それがまた地域の活動に参加するという、とてもいい循環ができていったように思いまして、今では土着民というか、本当に県外出身なのと言われるくらい、地域でお世話になっております。

３番目の活動をする上で困っていることというテーマですけれども、これには、全く個人的なことなのですが、今、親の病気や介護のこともありまして、継続した活動ができにくい状況になりまして単発なものになってしまっているのですけれども、そういったことはいつか時間が解決してくれることだなと思って、今はできることでいいのだよという言葉に甘えさせていただいて、少し細々とやらせていただいておりますが、少しわくわくするような感動が少し薄いかなと、自分では寂しく感じております。

今後、活動を継続する上で必要なことということなのですが、社会教育とは関係ないかもしれないのですけれども、まずは、最近、少し家族でもいろいろとありましたので、自分の健康と穏やかな家庭環境と、あとは相談できる仲間、本当にこれには随分と助けられましたので、少し社会教育とは関係ないかもしれませんけれども、一番感じていることです。

行政に期待する支援とはという、少し、こちらも違うかもしれないのですが、学校の学習支援ボランティアに時々行かせていただくのですが、少し寂しい思いをするときがあるのです。プールの監視とか、そろばんの学習、ミシンの使い方、そういった活動に、地域教育コーディネーターの方から連絡をいただいて、時間の空いているときに参加させていただくのですが、年々変わってきていますし、全てがそうではないのですけれども、教室に入ったときに紹介も何もないときがあるのです。ボランティアとしては少し寂しい気持ちでして、先生方は、もういつものように始められて、分からないことがあったらボランティアさんに聞いてくださいという感じの声掛けがあるときもあって、少し、ボランティアさんではなくて、私たちは名前もあるし、名前でお互いに呼び合うような関係もほしいなと思いますし、少し、その辺は寂しいなということがあるのですけれども、もしかして、私たちは必要ないのかなと思ってしまったりして、前回の会議で、全校に地域教育コーディネーターが配置されるということをお聞きして、少しそういう思いがあったものですから、先生方、本当に必要とされているのですかということをお聞きしたのですけれども、せっかく、地域の人間というのは、本当にいろいろな財産を持っている人間が行っておりますので、また、地域教育コーディネーターの方がボランティアさんをお願いするというのは、本当は大変な作業だと思いますので、いくら時間がある方でも足を運ぶというのは大変な作業ですので、せっかく行くボランティアがいろいろな地域や財産を持っておりますので、もっと先生方のほうも密な関係を築いていただけたら、私たちも、ボランティアのほうも、もっと行きやすくなるのかなということを時々感じております。全てがそうではないのですけれども、時々そういう寂しい思いがしますので、期待する支援ということとは少し言葉が違うかもしれませんが、ぜひ、そういうことも、どんどん広まっているようですし、とてもいい制度だと私も思いますので、地域と学校と、みんながいい関係が作れていけたらいいなと思っております。

自分の経験を踏まえてということなのですけれども、私は、学習活動をして社会活動につなげるというよりも、社会活動のほうが先にきたような感じがありまして、社会活動をしていて、あら困ったなと思っていろいろな皆さんのお話を聞いたり、民生委員のほうですと福祉のことはやはり素人ですので、行った先々で相談を受けたりすると、包括支援センターに行って駆け込み寺のように教えていただいて、橋渡しの役目をさせていただくということで、いきなり、学習活動をしないまま社会活動に入ってしまったという感じがあるのですけれども、でも、嬉しいなと思うのは、そういってできた仲間、あるいは行政の方もそうですし、いつまでも声を掛けてくださる、忘れないでいてくださるのだなという気持ちが嬉しくて、それに乗せらせて現在に至っているというようなところもあるのですけれども、やはり講座でも何でも、終了してしまったらそれで終わりではなくて、本当に常々声を掛けていただければ、私たち、多分、ほいほいとついて行くようなところもあるのではないかなと思いますので、学習活動を社会活動につなげていくためにどんな支援が必要でしょうかという、そういう大きな支援というものではないのですけれども、常々声をかけていただいたおかげで私はここにもお邪魔させてもらっているというところがありますので、もっとも基本的な

ことかもしれませんけれども、皆さんもよく分かっていることかもしれないのですけれども、私としては、そういうことを個人的に感じております。

民生委員・児童委員のほうを、私は２期６年で、今年度の 11 月に改選があるのですが、こういう経験をした方がたくさん地域にいればいいなと思って、今年は退任を希望しているのですけれども、なかなか後釜が決まらなかったり、すでに穴の開いている地域もありますので、ぜひ、皆さんも声掛けをしていただくなり、いろいろとお役目を終わった節にはご参加いただきたいと思っております。以上です。

（相庭議長）

ありがとうございました。

次に、川上委員のほうからお願いできますか。

（川上委員）

今、お話の中で、非常に耳の痛い思いもしながら、私は、活動を始めたきっかけというのは、今から 10 年くらい前の、もちろんＰＴＡもあったのですけれども、10 年くらい前に県立の生涯学習推進センターで研修会を受ける機会を得まして、それを受けた結果、たまたま旧中之口村の公民館で子どもの事業を立ち上げるので、そのお手伝いをしてもらえないかということでお声掛けをいただきまして、旧中之口村地区の公民館で子ども関係の事業を立ち上げて、お手伝いしていました。それをきっかけに学校に入ることも多々ありましたので、そのときに、初代のパートナーシップ立ち上げのときの山岸校長先生が、ぜひ学校でこういうことが始まるので手伝ってもらえないかということでお声掛けいただきまして、１年間は公民館と学校、地域教育コーディネーターと、二股かけてお仕事をさせていただきました。それからずっと、今、学校のほうにお世話になって、今年度で７年目になりました。

活動をしてみて感じることと言いますと、正直、私も学校というのは保護者の立場で入っている部分しかイメージがなかったのですが、いざ、自分が職員、新潟市の非常勤職員として学校組織の中の一員として入ってほしいと。もう、ポジションは、学校の教務室の中に机を置いておくから、ここがあなたの席ですよ、ここにいなさいと、まず校長先生に言われました。とても、最初は荷も重かったです。それは、時間とともに随分いろいろなことが言えるようになったのがいいのか悪いのか分かりませんが、居心地がよかったです。正直言って。入るところの中でも、最初から教務室にポジションをいただいたのは、うちと坂井東くらいだったように思います。それだけ校長の熱い思いがあったのかなと、すごく感じております。

あと、その学校文化に慣れるには時間が必要ですし、なかなかいろいろなことが、入ってみて保護者の立場でいるのと、いざ自分が職員として、組織の一員としているというのが、随分違うことも多々ありましたけれども、うちは、最初からポジションの位置付けというところでしっかりと位置付けされまして、職員朝礼とか、もちろんそういうものも出なさい、出なければ仕事にならないぞと言われて、随分フォローしていただいて今に至っています。それは、やはり私たち、一般のところの中で、いろいろな話が、横のつながりを持ちながら地域と学校ふれあい推進課のほうにはお話させてもらいながらきて、今に至っているのではないかなと思うことがたくさんあります。

現場での多忙化というものが、ひとつのことが終わると、また次の多忙化が出てきて、何かいたちごっこなのかなということが、やはり私たち、先生方の多忙化を解消することもひとつの役割としてあるのではないかなと思うのですが、それが本当にあるのだろうかと思うようなことが、やはり、最近特に感じます。

うちのように、本当に田舎の小さな学校、１学年が１学級しかないような学校であれば、級外の先生もいません。本当に、出張とか、子ども行事が重なってしまうと、申し訳ないのですが、本当に職員室に電話番をする事務役をする者がいなくなるような、そんな状況が今起こっているので、本当に現場は大変なのだなと。小さくなればなったなりに、大きいところは大きいなりの悩みもあるでしょうけれども、現場に人が足りないということを本当に実感しています。

私たち、教員ではありませんので、職員ですけれども教員ではないので、できることとできない

ことがありますし、また、ボランティアさんがたくさん入ってきてくださっても、やはり教員ではありませんので、できることとできないことがあるので、そういった辺りが、やはりこれからどんどん少子化になっていくのですが、その辺りが非常に難しい問題、また統合とかが入ってくるでしょうし、しばらく、そういったものが大きなウエイトで、うちの学校などは、やはりあるのだろうなと思って、今日々生活を頑張っているのですけれども。

あと、困っていることとか、いろいろとまとめてお話させていただきたいのは、私たちのポジションを下げないでいただきたいという、それを声に出して言いたいのです。本当に、最初は人数が少なかったので、わりと手厚い、いろいろな面でありがたかったですけれども、増えれば増えるほど、予算もなくなっていきますし、手弁当で皆さんも来てくださっているのですが、それだけでは事業が継続していかないと思うのです。では、これからどうしていったらいいのでしょうかということで、私たちコーディネーターは、仕事として入っているので、ボランティアではありません。というところを、私たちコーディネーター自身も認識をしっかりと持って取り組まなければいけないと思うのですが、その辺りを、やはりこれから議論して、現場の声、あるいは現場を見ていただいて、いい方向へ何とかつなげて、継続事業として、これだけいいと言われているのですが、現実はなかなか厳しい。さきほどおっしゃった小須戸のお話もありましたけれども、何の報酬もなくみんな頑張っているのですけれども、こらからまた下がっていくようであれば、士気も下がるのでは困りますよね。

私個人的には、地域教育コーディネーターとコミュニティコーディネーターを、やはり一緒にしていらっしゃるような方がいるのではないかと。その辺りが非常に危機感を持っております。私たちは、やはり学校現場の、教育の学校現場に配置されているというところで、最初スタートしたので、そのポジションを変えないでいただきたい。位置を変えないでいただければ、非常にありがたいのではないかと切に願っております。以上です。

（相庭議長）

ありがとうございました。それでは、お二人のご報告でございましたが、質疑応答にしたいと思うのですけれども、ご質問、ご意見のある方はいらっしゃいますか。いかがでしょうか。

（中村委員）

地域教育コーディネーターが全部配置されて、本当に予算が年々上がっていると聞いていて、大変だなという話は他の方ともしたことがあるのですけれども、例えば、今は小学校・中学校にいるわけなので、同じ校区が重なるわけですよね。そうしたときに、例えば、学習支援ボランティアであるとか、その登録している人とか、何かつながりとか連携みたいなものはあるものなのですか。地域というデータベースがあるというのは同じだと思うのですけれども。

（川上委員）

小中連携ということだと思うのですけれども、うちの学校は、最初入ったのですが、入ったのが一番最後、今年度、他の学校が入って、２小、１中なのです。やっと入ったばかりで、やっとスタートラインに立ったというのが、今のうちの、中之口地区の状況で、他のところは、結構連携ということでいろいろなことをやっているみたいですけれども、うちの中ではまだまだ。でも、やはり、うちでボランティアをしている人が、中学校のボランティアも兼ねたり、そういったこともあります。多々あります。

（相庭議長）

ほかにいかがでしょうか。

（齊川委員）

まず、宇賀田委員さんの、紹介がなくて寂しいというのは、ボランティアからみれば確かにそうだと思いますね。うちの学校では、教員の中に生涯学習担当という校務分掌もつけていますし、そして、地域教育コーディネーターも、最初は教務室に入っていいただいていましたけれども、ふれあいルームというものがありますので、そちらに常時いてくださって、地域の方と話し合っていただいています。ですから教室に入ったら、当然先生がまず紹介します。それは学習ボランティア。

あと、行事ボランティアというのでしょうか。スキー教室でのボランティアとか、いろいろな、習字なども初めての習字というものを３年生で、公民館の方の習字教室の方が来て下ってやる。そういうときは、当然教員が、ボランティアの方ではなくて、実際、一人の先生という形で紹介する。それは、校長がいかに教諭を育てているかどうかということかなと。少し言いづらいのですけれども、思うのです。やはり、分かっている校長先生の下の先生方はきちんと紹介してくださると思うし、最初はどの学校でもきっとそうだったと思うのです。だんだん、７年目とか、６年目、７年目という時間が過ぎていくと、何となくいつも来てくださっているからとか、そういう甘えから紹介しなくなったとかということがあるのかなと思いますけれども。

（宇賀田委員）

各教室を回っていると、やはり先生方にもよりますので、本当に年々変わってはきています。それは感じています。

（齊川委員）

その辺は、きっと宇賀田委員さんの話を、そこにおいでの河内課長さんがお聞きになっていますので、きっと、何かしらの指導があるのではないかなと思います。

あと、学校としては、もうひとつの川上委員さんのほうですけれども、地位を上げる、下げるというのは、やはり行政のほうが考えることで、我々のほうでは、少し分からないなというところですね。

それから、多忙化を感じるという、先生方の多忙化の解消になっているのかなとありますけれども、あくまでもコーディネーターさんというのは、子どもをどうするかというところなので、先生方が多忙化が解消されているかどうかとか、そのようなことを思う必要なないと私は思っています。以上です。

（相庭議長）

ありがとうございました。学校では、子どもたちにあいさつしろ、あいさつしろと教える先生が、紹介もできないとなるとね。変わった、常識的なものになっていく、特異な社会だなと思って聞いていました。

ほかにいかがでしょうか。

（斎藤教育次長）

学校経験者として、今のあいさつというか紹介の話ですけれども、確かに、今、相庭議長もおっしゃったように、学校では、どんな学校でもあいさつ運動に取り組んでと、一生懸命に子どもたちに言っていますけれども、そういう意味では、慣れということもあるのです。ボランティアに来てくださることに慣れてしまって、つい忘れてしまうというところはあるのではないかと思いますが、それは、やはりきちんとしなければなりません。ボランティアで補助的な場合も、また、例えば習字とか、本当に教えていただくという場合もあるわけですから、それはきちんと紹介するのが礼儀だと私も思います。私も、矢代田のときには、なるべくそうするように心掛けてはいましたが、その中には、慣れからくる慢心ではないですけれども、そういうこともあるのではないかと。しかし、その都度、管理職が指導していかなければいけないことかなとも思います。

地域教育コーディネーターとコミュニティコーディネーターを混同しないようにというお話でしたけれど、やはり教育コーディネーターさんは、やはり学校と地域の橋渡し役という非常に大きな位置を占めておられるので、それは変わることはないと思います。ただ、今度、公民館というか、地域の公民館も含めた地域のコミュニティの形成、地域の力を強くしていくというか、広げていくというところになると、その地域教育コーディネーターさんがその力を、こんどはコミュニティにも少し使ってもらえればいいかなと、そういう気持ちはあります。それは、一緒にするとかということではなくて。だから、例えば、地域教育コーディネーターさんも、多分、川上さんのように７年目でずっとベテランの方と、今年からという方もいます。

ただ、同じ人がずっと何年も続けていくわけには、多分難しいと思いますし、例えば次の世代の人にバトンタッチをするときがいつか必ずくるわけですので、それはそれでそういう次の人を育て

ていきながら、バトンタッチした人は、今度、もしその力にまだ余力があれば、また地域の中に入っていってもらって、ひとつは、そういうコミュニティコーディネーターとして活躍していただくのも、市民力というか、そういうことで求めていくことができればなと、ある意味考えているところもあります。地域の中のコーディネーター、今はコミュニティ協議会とかの活動が活発になってきていますけれども、やはりそこも次の世代というか、担い手は必要なので、そういう意味では、ひとつの方策というかモデルとして、学校で地域教育コーディネーターとして活躍していただいた方が、地域に戻ってというか、そういう地域の担い手というか、地域のコーディネーターをしていただくということもありなのかなと、私は思っています。

（相庭議長）

いかがでしょうか。ほかにはどうでしょうか。

社会教育の、先ほどの「社会教育活動の実践例から考える」の最初に、活動を始めたきっかけとあったじゃないですか。私自身にも言えることなのですけれども、やはり学校ですよね。ＰＴＡとか、それが、やはり地域との結びつきの最初ですね。だけど、それから卒業してしまって子どもが離れたらどうだろうかとなると、こういう社会教育の専門職なものですからいろいろと話は聞きますけれども、実際、地域から距離ができていますよね。

そのときに、地域教育コーディネーターさんという人たちも、あるいは女池っこランドと言われている学童保育しているボランティアの人たちを見ていてすごく思うのは、地域教育コーディネーターさんやボランティアさんは、ＰＴＡとかのキャリアを積んでいる人が多いのですね。だから、すごく配慮が効く。その力がすごいところがあるのですが、残念なのだけれども、学校の先生、これは別に学校の先生が悪いというわけではないので間違わないでください。学校の先生たちが、例えばあいさつがどうだというときに、また校長が指導するのだと。

確かにそうなのだけれど、見ていると、学校の先生たちの多忙という言い方をしていいのかどうか分からないのだけれども、視野が狭くなってしまっていて、地域から何を言われるかと思って、みんなビクビクしているのです。何でこんなに怯えているのだろうと思うくらいに学校の中がピリピリしていて、例えば、もうＰＴＡをやめてしまった人が、今度、少し学校に遊びに行きたいのだけれどと言うと、何しに来るのですかと聞くわけです。そうでなくて、学校はいつでも入っていいわけでしょう。だけど、そのように入って来る人に対しての緊張感みたいなものが、もちろん事件があるからそうなのだと言われればそうなのかもしれないけれども、それで多くて、そして、若い先生たちの横のつながり、先生たち同士のつながりが希薄化しているのですね。

だから、縦系は強いのです。要するに、校長先生、教育委員会から指導を受けるのはすごく得意なのですけれども、横のつながりが弱いから、だから、私から見ると、スキルが逆転してしまっているのですね。子どもたちを指導するとか、人間関係をつくると。本来は、地域から入って行った人たちのほうが下手で、やはり先生上手いよねというのが、それが逆転してしまっていて、先生のほうが下手で、だから、寂しい思いをするというような表現はよかったけれど、もっとちゃんとやれよというのが本音なのですよね。それは、逆転したのですよ。だから、ここをどうやって直すかというのが、おそらくポイントなのだろうなと、私などは思いますね。たとえば、今後、長谷川さんが附属のことを話してくれますけれども、おそらく長谷川さんのスキルのほうが、附属小学校の先生よりも高いですから。だから、これをどのように地域の地域教育コーディネーターさんが入ってくれて、地域とつなげるだけではなくて、学校にいる先生たち一人一人の視点を地域に向けさせて、地域の一人一人の人たちの学校への視点を向けさせる。そこを、うまいことつなげていくと。その技術が、おそらく、そういうところが地域教育コーディネーターさんには必要なのだろうなと思いました。そうしないと、学習ボランティアさんも難しいですよね。そんな感じがしました。

（中村委員）

今、心の健康問題ということで、学校の養護教諭の先生であるとか、生徒指導主事の先生とか、スクールカウンセラーの先生とか、いろいろとお伺いしているのですけれども、本当に学校現場は、私も小学校にいたのですが、前よりももっと大変になっているのだなとすごく感じます。その中で、

本当に子どもが好きでないとなかなかできないなということをやられていて、本当にあれも見なければいけない、これも見なければいけないと。昔よりも目を向けなければいけないことが非常にあり過ぎて、それでいて文書みたいなものがたくさんあってということで、それを全体でどう支えていくのかといったときに、やはり、例えばビジョンみたいなものが話せる、みんなが、同僚制というわけではないのですけれども、いろいろな人が入っていってうちの学校はどうするのだ、子どもたちをどうしていくのだ、どうつなげていくのだという辺りのところの、どうつないでいくかという辺りのところがすごく大事になっているのかなと思います。

そこがないと、ちょっとしたあいさつがないとか何とかというところに亀裂が入るのだけれど、まず、私たち、どこを目指していこうとしているのかしらみたいな。ただ、それをやるだけのゆとりが今なかなかないという、本当にゆとりがないなと思いますね。ただ頭が下がるというか。今、関係機関にもいろいろと回していただいているのですけれども、子どもが心の健康問題を抱えていても、受診しようと思っていても、２か月、３か月待ち。その間、どうするのだと。今、学校の中で荒れている子をどうするのみたいなところで、やはり苦慮していると。ポジティブな部分もあるのだけれど、いろいろなところに対して対応しなければいけないというところもあって、そういう中で大変だと思うのですけれども、学校に力を出していただけるということはありがたいと思います。少し話がずれましたが。

（相庭議長）

ありがとうございました。興味深いお話が続きそうなので、この辺で切るのはおしいのですが、お二人のご報告、ありがとうございました。

それでは、後半にまいりたいと思います。佐藤さんと長谷川さんのほうから報告が用意してありますので、佐藤委員、よろしくお願いします。

（佐藤委員）

では、私は、今日は新潟市小中学校ＰＴＡ連合会副会長として来させていただいていますので、その立場からお話をさせていただきたいと思います。

まず、先ほどから出ている活動を始めたきっかけなのですが、私の場合は、ＰＴＡ役員とその活動そのものが全くつまらないことだと主張する友人がいまして、会うたびに愚痴を聞かされていまして、ただ、彼女が言っていることも納得はできるのですけれどいまいち解せない部分があって、なぜそのような気持ちになるのかが分からなかったので、自分で入ってみようと思いました。そして、なぜ彼女がここまでぐちゅぐちゅ言う気持ちになるのかというのが、結局いくら聞いても分からないので現場に入ってみたところ、つまらないとかつまらなくないというのは、自分の気持ち次第なのではないかなということに気付きました。楽しいと思えば何でも楽しいし、辛いと思えば何でも辛いし、ということなのではないかなと。

私自身、じゃんけんに負けたわけではないのですけれど、ＰＴＡ会長を４年させていただいていまして、そのときに、何が大変だったかというと、その当時は、私の前のＰＴＡ会長さんが割と外を向かない方だったので、外の会議を全部断ってきたり、それこそ、今私が属している市Ｐも、この前退任しましたけれど県Ｐも、そっぽを向かれる。結構、そういう方いらっしゃるのです。そういう方だったので、育成協の会に出たときとかも散々怒られました。私。頭を下げて１年目が終わりました。結果、自分自身の戦いもあったり、その外との、どういう折り合いをつけるかという、ものすごく頭を働かせて、会議という会議は全部出て、飲み会という飲み会は全部出てというやり方をして、とりあえず外とのつながりをまた戻してきました。周りへの気配りとかにも終始したのですが、結果、それが、４年間やってみて、今の私の大きな基盤になっているのかなと、私を大きくしてくれたと、本気で思っています。

私が４年間頑張ってきた背中を、私の子どもたちがきちんと見て感じ取ってくれて、それを励ましてくれたり、声掛けしてくれたりということがあって、小学校のＰＴＡ会長は終わったのですが、その頑張りを認めてくださる方がいて新潟市Ｐとか県Ｐに入ることになったわけなのですが、そういう大きな組織に入った後も、子どもたち、それが自分の子どもだけではなくて、私の活動を見て

いる周りの保護者の人たちが、その保護者の子どもたちに私が頑張っているということを伝えてくれたので、その子どもたち、他所の子どもたちも、私が頑張っていると見てくれて、応援をしてくれていました。そして、それが、今も勇気をもらっています。

その活動をする上で困っていることとあるのですが、これは、実は、市Ｐに属していますと充て職と言われる会議がいくつもありまして、実はこの会議もそうなのですが、女性限定であるとか、業者のほうから呼ばれて出向かなければいけないものが結構たくさんあるのですが、その会議の中で、子どもたちにとって有益な情報があったとしても、それをダイレクトに降ろせるシステムが今まだないという状態です。それを末端のＰＴＡの皆さんまでお知らせしたいことは山のようにあるのだけれども、どのようにお知らせすればいいかが分からなくてまだモヤモヤしています。一応、理事会とか、市Ｐの役員の理事会とかではお伝えはしているのだけれども、これは多分、末端のＰＴＡまでには届かないだろうなと思いながらやって、モヤモヤしています。

今後、活動を継続する上で必要なこと。それが、今言ったことのそれが悩みでもあるのですが、その解決策としてのシステムを作ることがこれから必要かなと思っています。それと、今年度の６月１日の総会で、新潟県のＰＴＡ連合から新潟市のＰＴＡ連合が、政令指定都市ということで、若干遅かったのですが独立させてもらいました。円満に独立をさせてもらいましたので、今後、政令指定都市Ｐとしてどういった形でやっていくべきかということを、今、本部役員で話をして検討中です。こういう会議のこともそうなのですが、システムづくり、それから規約改正もそうですけれど、いろいろな意味で改正が必要になってきているので、それを、今検討中です。

そこで、行政に期待することは、できれば、可能であれば、補助金の減額は、そこはキープでよろしくお願いします。実は、この前、少し別の会議に出させていただきましたが、各区に教育委員さんを置くというお話をさせてもらったときに、私、発表したくて、全然発表するタイミングが取れなくて言えなかったことなのですが、できれば、各区に置く教育委員さんという方には、子どものために即動ける人を選出していただきたいということと、それに、何課か分からないのですけれども、学校支援課とか、いろいろな課があると思うのですが、課が直接関係することなく独立した存在にしていただければありがたいなと思っています。要は、教育委員さんの動きやすい環境を整えていただきたいということです。

学習活動を社会活動につなげていくためにはということなのですが、ＰＴＡ活動とか地域子どもとふれあう活動というのは、結果として数字には表せません。良くも悪くも人の心に大きく反映する場合があります。なので、先ほどもお話がありましたが、常に人の気持ちに寄り添って理解しようとする気持ちがある人が近くにいれば、それだけで、多分人は頑張れると思います。それは多分、時間も労力も非常に必要になってくるのですが、そういう気持ちを持った人を地道に増やしていけば、次の若い世代につなげていけるのではないかなと思っています。以上です。

（相庭議長）

ありがとうございました。

続きまして、長谷川委員、お願いいたします。

（長谷川（克）委員）

私が社会活動に関わったきっかけは、青年会議所（以下、JC）に入会したのが発端でした。JC に入った年にフィリピンのピナツボ火山の噴火があり、JC が全国からボランティアを集い２週間くらいピナツボ火山に支援に行く企画があって、それに参加したのがこの組織に深く関わる始まりでした。後のナホトカ号の座礁事故や阪神淡路大震災のときにも、JC のボランティア活動に関わりました。JC の活動テーマはさまざまですが、単年度制の組織・活動であることから、毎年新たなリーダーが選出され、事業と組織の再構築が繰り返されます。そのような視点には、大きく感化されたように思います。

その当時、ベルリンの壁の崩壊があり、これからは、ロシア極東との付き合いを深めていくことが新潟の強みになるという意見から、「はばたけ 21 未来の子どもたちへ」という新潟の小学校の５、６年生の子どもたちとロシアの子どもたちを交流させる事業が立ち上がり、20 年続いています。

子どもの募集では、新潟の子どもの集まりが悪い時、個別で学校への依頼に伺ったこともありました。学校によっては、どこの人みたいな感じの時もありましたし、理解いただいた先生には対象の子どもたち全員に案内を配布いただけた学校もありました。学校によっては、紙代がもらえるのなら案内しますよというところもありました。基本、募集に関しては新潟市の市報に頼り、大変お世話になりましたが、合併前にはスムーズに掲載いただけたものが、政令市になってからは市主催事業でないと掲載いただけない時代にもなりました。このような活動もしています。

ほかには、新潟の活性化ということから、新潟の空港や港をテーマにして始めた活動もあります。空港や港は、市民サービス施設ではないので、「この公共施設を利用するのは誰だ」と経済圏から考えたわけですが、このような課題において、地方は簡単に東京に頼り一極集中的発想で思考してしまいがちです。観光でも新潟県は、セールスの対象を東京に向けていて、隣県の観光客をその対象にしていない感じがあります。このような視点から、新潟、長野、群馬の三県を対象とした上信越のトライネットという地域連携を提案する事業が派生し、これにも20年くらい関わらせていただいています。20年経った最近のテーマは防災で、防災に際しての地域連携の話をしています。今回の東日本大震災の場合、被災地に対して、新潟はバックヤードとしての機能を果たすことができました。今後、首都圏直下型の災害が発生した時のバックヤード機能は、大宮なのか、地盤がいい高崎はどうか、高崎市には首都圏ＪＲのバックアップ機能があるようです。防災を考える時、被災地と非被災地だけの連携ではなく、被災地へのバックヤード機能の役割分担を考えた防災連携を協議しませんかという視点です。ほかには、地盤のいい地域における防災連携研修会みたいなものや、市役所職員向けの連携なども模索する話をしています。

このような経験をさせていただく中で、私の子どもも成長し、ＰＴＡにも関わらせていただく機会をいただきました。長男は附属新潟小学校に入学しました。長男は地元の小学校に入学させるつもりでいたところ、その学校の保護者役員から入学したらすぐＰＴＡ役員にと言われ納得できずにいました。そんなとき、たまたま子どもを附属小学校に前年度入学させた知人から、附属の良い面を紹介いただき、それに感化された私は、長男に附属を受験させることにし運よく入学に至りました。しかし、附属小学校でも、やはりよく来たねと言ってくれる保護者役員がおり、それから子どもが卒業するまでＰＴＡにかかわることになりました。二男は、地元の市立桜ケ丘小学校でした。ここでも晩年ＰＴＡの関わりをいただくことになりました。この学校では、３年生担任教諭が、子どもを教室から机ごと出す事件がありました。その前からＰＴＡ会長の成り手がいない状況もあったようで、当時この学校はＰＴＡ三役という形ではなく、総務委員会という形態でＰＴＡを運営していたようです。したがってＰＴＡ会長は存在せず、この事件を通して、ＰＴＡ代表ということで、総務委員長がその任を明確に担ったようです。この学校では、ＰＴＡ役員を回避する保護者意識が強く反映されたルールで、役員の選出では度々物議をかもしだしていたようです。私もそんな中で桜ケ丘小のＰＴＡ役員をさせていただき、市立と附属という違った学校組織に関わらせていただきました。附属学校では、大学の学部附属という関わりの中で、保護者による子どもたちの教材や学習環境整備における資金開発的な事業も経験し、市立と違った一般的ＰＴＡ活動の枠を外れるような経験もさせていただきました。

時には、そういう一面が面白くて、私自身が学校に足しげく通ったこともあります。そういう経験から感じたことは、先生は子どもと関わることがうれしくて教職員になっているということです。半面、教育界における組織づくりやその運営に関しての視点が弱すぎると感じましたし、教育制度全体に関わるエネルギーが低いと感じています。そういった意味合いでは、教育に関する問題が指摘される時や、教育行政の未来に憂いを感じたとき、政治家とは言いませんが、教育界におけるリーダーをどのように育み、見出すのかという考え方に乏しいと思いました。

教育行政に関わった教育委員会にいるような人たちが、教育制度をも視野に入れたリーダーになっていかなければいけないと考えますが、早く教育の現場に復帰したいという人が多いわけです。政令市新潟は、独自の教育ビジョンを提唱し、教職員の人事権を有する形になりましたが、教職員の核となる組織としては、先生方を生み出す新潟大学教育学部と上教大という組織もあります。先

生に採用されてからは、定期研修や免許更新など、先生を育成しなおすセンター等の機能があるにしても、時代の要請に応えたシステム的な教育課題の調査・研究や、子どもの成長レベルに合わせた保護者育成の研究など、それらを大学組織との連携で解決していくような仕組みづくりが弱いと思っています。

前置きが長くなりました。過去の活動報告としては、一般的ＰＴＡ活動の枠を超えると思うようなものを提出させていただきました。一斉メール送信というものは、ネットンという資料もありますが、大阪の附属池田小学校での殺人事件を発端にして行った事業です。当時、保護者へのアンケートなども実施し、学校と保護者間での緊急連絡の仕組みがいるよねという要望から取り組みました。今の市立学校では、メーリングリストを各学校の管理体制の中で利用しているようですが、それに先駆けてソフトを作ったものが「ネットン」という学校と保護者を対象にした通信システムです。このソフトは、他の小中学校にも売れますよということで、ＩＴ業者さんにお願いして作っていただきました。６年くらい前の暮れに発生した新潟市大停電の時にも機能しています。なぜかと言うと、このソフトは、県外サーバーで管理できるＡＳＰ型ソフト（サーバーにあるソフトをクライアントが web プラウザから操作する仕組み）にしていて、それへのアクセスは、パソコンからの操作だけではなく、携帯電話にキーボードを取り付けて、使用できるようにしていたからです。クラス単位、学年単位、学校単位、クラブ活動単位等々で、教頭先生の管理下において、保護者に向けて個別連絡が行える設計にしました。普及という面では、結果、附属の小学校と中学校でしか利用いただけていない状況です。当時の新潟市ＰＴＡ連合や北信越地区附属学校園協議会の研修会などで、デモンストレーションや説明会を実施しましたが、運用コストが高いということで採用いただけませんでした。そんな活動もしました。

また、家庭と学校を考える懇談会という資料も用意させていただきました。この年は、保護者が、子どもの成長と時代のニーズを踏まえ、どう成長するのかという視点から、保護者対象の連続研修会ということで、９月から３月までに６回開催しました。この年の学級・学年の活動とは別に行った研修会で、附属の特質性も踏まえ、新潟における帰国子女の優先的受入なども考えさせる講演会もしました。しかし、この研修会への参加者は、大体代わり映えしない状況で、先生への参加も呼びかけましたが、多くの賛同は得られなかったように記憶しています。この中にはコーチングの研修もありましたが、これには私自身が強く感化され、３年かかりでコーチングの免許を取ることになりました。

一般的に、子どもが生まれたら親と言いますが、それは、赤ちゃんを授かった親１年生であって、小学校に入学する子どもの親は、小学１年の子どもの親１年生なんです。初めて中学校に入る子どもを持つ親は、中学１年になる子どもの親としては１年生なんです。２人目、３人目の子どもでは、その経験が活かされることもありますが、時代の変化もあり、子ども一人ひとりの育て方は変化し、親としていつも新しい学びに気づかされます。公衆電話から携帯電話、携帯電話からスマホ等、時代の背景が変わった時、子どもを育む環境にそう反映するのか、親の学ぶ機会はということを考え行った事業でした。

他には、附属ＰＴＡの北信越地区附属学校園保護者研修会を新潟で開催させていただきました。全国附属ＰＴＡ連合会中でも、各地域とか全国の附属のあり方みたいなものを議論したり、見学させていただく経験もいたしました。附属新潟小中学校の存続が危ぶまれた時には、この附属は教育学部における実習校でしたので、医学部の研究に利用いただく研究校にできないものかと提案したこともありました。教職員の研修機関としては、県も市も研修センターをお持ちですが、私は実質的研修の場としての附属学校園を評価し期待を寄せていました。附属学校の職員採用には、いろいろご苦労があるようですが、あらためてその価値をご理解いただき、地域による更なるご活用を願っている次第です。

昨今、子どもたちに関わる様々な事件が多々報道されるようになり、学校における取組はますます多様化し、オーバーフローをしかかっている先生もたくさんいらっしゃるように思っています。これは中学校よりも小学校のほうが顕著だと思っています。小学校は、一人の先生が１つのクラス

を受け持つ仕組みになっていて、一人でクラス全員の子どもたちへの目配せを求められるということで、見逃す部分もあると思っています。そういった意味合いでは、問題が小さな時には気づかず、問題が大きくなって顕在化してから対応することもあると思っています。中学校では、１クラスの学科ごとに先生が入れ替わり、多くの人の目で見る仕組みになっていますが、小学校では、一人で見る先生の意識やスキルが弱いと、問題が大きくなってから気づくこともあると考えます。

先生の研修の機会としては、定例研修として15年研修などもあるようですが、教育実習のようにスキルの高い先生が日頃からサポートするような、時代に沿って新たな仕組みがほしいとも思っていて、新潟市教育委員会では、新潟大学にこのような教職員研修の連携などについても、要望をされているようなので期待しているところです。今秋、新潟大学では、学長と教育系副学長が退任されると伺っています。今後どのような方に代わるのか分かりませんが、そういう意味合いでは、現状の体制下で、先生方の組織でも地域の教育力というものをもう一度見直してもらいたいと切実に思っているところです。

余談ですが、図書館の話もありました。附属の場合は、小中学校共に司書の先生がいらっしゃらなくて、ＰＴＡ活動とは別に保護者ボランティアで図書館運営をしてきました。この図書館ボランティアの組織は、小学校で始まり、後に中学校でもつくって図書館の書架等も整備してきました。附属学校保護者の意識レベルは高いですが、その分熱心とも言え、口を出す人も多いところも感じます。したがって、ボランティアの成り手にしても、ＰＴＡとの関わりから、やりづらい面もあり、ボランティアの継続性という面では、難しい状況があります。子どもは、単年度でステップアップしていきますが、図書館運営のボランティアに関しては、継続性ということと、図書館の質の維持向上という課題があります。過去には、新潟市の司書教諭の会に協力を求め、図書館ボランティアへの講義や懇談をしていただいたこともあります。

最近では、新潟市小中学校全校の図書館に司書が配置され、司書教諭の給与体系や勤務体系の見直しもされました。新潟市の合併地域の学校には、司書教諭のいないところもありましたから、全校配置は良かったのだと思いましたが、もともと配置されていた旧新潟市の学校では、フルタイムでの配置が当たり前だったので、その変更に対する課題もいろいろと指摘されたように伺っていました。その補完機能としての公立図書館による学校図書館支援センター設置には、大変期待していたところです。

長男が附属学校に在校していたころ、図書館の相談事に際しては、附属学校から市立学校へお願いして、司書の先生に附属へ来ていただいたこともありました。学校図書館支援センターさんが設立された時は、すぐにお問い合わせさせていただきましたが、残念なことに新潟市立の学校が対象ということで、附属学校からの依頼は、基本的に対応できないとのことでした。確かに附属は、新潟市立の学校ではないですが、この学校にいる子どもたちは新潟市民です。そういった意味では、市民サービスの観点から対象としてみなしていただきたいと思っていますが、いまだ基本的には対象ではないということのようです。ぜひとも、前向きな対応をお願いしたいと思っています。

また、最近思うのは、改革ということでは、どんな組織も、教育委員会でも、反対で改革により困る人たちがいます。改革は、白黒判定思考ではないのですが、大なり小なり現在と過去の否定になるからだと思います。他組織との新たな関係づくりというような手法が、自己改革よりは、やりやすいかもしれないと思っています。

例えば、新たにできた新潟市の地域教育コーディネーターは、今年で全校配置になりました。そのあり方は、検証を求める区切りの時になったと思いますが、できたものを変えるのは、反対も賛成もあります。既存の財源で多くの人材の雇用を考えた場合は、既存人材の給与が減ることになります。地域教育コーディネーターさんの配置については、１校５人という限度だったでしょうか。

（川上委員）

限度はないですよね。

（長谷川委員）

地域教育コーディネーターの採用については、当初５人までという目安は無かったですか。

（川上委員）
ないです。
（地域と学校ふれあい推進課長）
人数の制限はなくて、１つの学校の勤務時間の上限を定めているのです。
（長谷川委員）
そうですか。地域教育コーディネーターの採用については、各学校でいろいろ工夫されていて、小中学校のコーディネーターを兼務されている方もいらっしゃると伺っています。小学校と中学校の地域教育コーディネーターの役割が、ひとくくりにされているようにも感じますが、子どもの発育に伴いカリキュラムも違うのですから、その役割も当然違ってきます。受験体制にフォーカスされがちな３年教育の中学校の地域教育コーディネーターのあり方は、どうなのだろうかと考えさせられたりします。雑感として長くなりましたが、今年、地域教育コーディネーターの全校配置が完了しました。これからは、そのあり方の見直しも必要になっていくと思います。
（相庭議長）
ありがとうございました。
それでは、佐藤委員と長谷川委員のお話についてですが、ご質問等はございませんでしょうか。
（齊川委員）
質問ではないのですが、だいぶ、教員のことについて長谷川委員から出ましたので。
長谷川委員さんが話した「はばたけ21」という、久しぶりに名前を聞いたなと。20年前、新潟市教育委員会で、私が最初の担当でした。あのときは、小山厚子さんとでした。その中で、学校によって、プリントを持って行っても対応が違うという。それは昔から言われていることで、私も県のほうの青少年研修センターとかいろいろなところにいるのですけれど、プリントを持って行っても、対応が全く違う。本当に、あ、そうといってぽんと置く人もいれば、親身になって、では増し刷りしましょうかねと言ってくださる先生もいらっしゃる。これは、本当に開かれた学校なのかそうでないのかということが一遍で分かるというところで。
（長谷川（克）委員）
先ほどの情報伝達と同じテーマですね。
（齊川委員）
本当に思っております。でも、ひとつ、昔の教員は、わりと地域に出て行ったのです。行事などがあると。祭りにしても何にしても、出かけて行きます。ところが、今の教員は、地域に出なくなってきたのです。プラス、コミュニケーション能力が、子どもにはつけようと言っているのだけれど、先生方がついていないというところがあるというので、割と学習面を本当に強くやってきたというところで、先生方は学力向上とずっと言ってきていますから、なかなか、そういう自分の力を出せない、だけど、６年前からの地域教育コーディネーターが学校に配置されてきたというところから管理職の考え方も変わり、そして一般の教諭の先生方の考え方も、次第に変わりつつあるのではないのかなと私は思っています。
もう一つは、社会教育主事講習というものが、相庭先生のほうからありましたけれども、本当に、新潟大学が２年やった後、信州大学が１年やっていって、２年、１年をずっとやっていたのが、本当に受講生が少なくなったということで、昨年、一昨年が一番最後の。
（雲尾委員）
今年、信州大学がやっているのではないかと思いますけれども。
（齊川委員）
いつやるか分からないというような状態になって、本当は。あのようなところに先生方がどんどん出れば、視野が本当に広がると思うのです。勉強一本でやってきて、教員採用試験を受けてきたのだけれども、地域教育コーディネーターというものが必要になってきて、開かれた学校ということを考えると、本当に学校教育だけではないのだと、子どもを育てるのは学校教育だけではないのだという辺りを、本当に分かるというのが１ヵ月間の社会教育主事講習だと思うのです。そして先

生方が出ていけば、それは年齢関係なく 30 代、40 代でも出ていけば、本当に自分自身の視野が広がっていくのかなと思うので、ぜひそうしてもらいたいなと思います。それは新大に言えばいいのか分かりませんけれども、先生方の多忙化、先ほども出ましたけれども、特別に配慮を要すること、支援をしなければいけない子どもが、本当に通常学級で多くなってきたのです。

（長谷川（克）委員）

どういうレベルか分かりませんが、よく言われますね。

（齊川委員）

ＡＤＨＤとか、そういう子が多くなってきていて、要はそういう子たちへの配慮について、気持ちをつぎ込んでいくと、ほかのほうに目がいけなくなってしまっているという部分がかなりあります。そうすると、学校のほうでは、市教委のほうに行って介助員さんをたくさんと言うのですけれども、やはり財政がということになるとなかなかと。そういったいろいろなものが絡んできて、先生方も大変だなというのが、今の現状です。

（長谷川（克）委員）

現状はそうなのですね。軽度発達障害という考え方は、13 年くらい前から顕在化し、公知になったのでしょうか。突然、広まった考え方だったように思います。その対応なのでしょうか、副担任制などの案も当時聞きましたが、予算の面から難しいことだと思っていました。

また、私は赤十字ボランティアもしていまして、今の時期だとプール監視のための「心肺蘇生法とＡＥＤ講習」のお手伝いで、２～３週に１度くらいはあちこちの学校にお邪魔する機会もあります。この講習では、学校が率先しているようなところと、ＰＴＡお任せの感が強い学校があったりして、さまざまですね。この事業は、ＰＴＡ事業のようなので、ボランティアのボランティアとして学校にお邪魔していることになるのでしょうか。この「心肺蘇生法とＡＥＤ講習」というのは、これを実施したから事故が防げるというものではありません。本当に子どもに対しての事故を防ごうという考えから派生した事業だと思うので、この講習に参加する体制づくりも大切だと思っています。

私たちは、プール監視のためのＰＴＡ講習会として伺っていますが、学校によって、教頭先生か教務主任が付き添うだけの学校もあれば、多くの若手教職員を保護者と一緒に研修させる学校もあります。このような研修は、教職員だけで何回も実施しているのかもしれません。しかし、この内容は、毎年のように変化したり忘れたりしてしまうようなものなので、教職員にも繰り返し体験させようという学校もあるようです。今年もプール事故が起きなくてよかったとなればそれまでですが、こういった人命に帰結するような事業に関しては、もう少し学校として関わってもらってもいいかなという気はします。都市部の学校より、郊外の学校の方が対応に余裕を感じました。

（相庭議長）

ほかにいかがでしょうか。

佐藤委員のほうから各区に教育委員を置くという話があって、そのときに、動ける教育委員を置いてほしいというお話が出てきました。私も基本的にそう思いますね。どうしてかと言うと、今、いろいろと議論になっていて教育委員会の教育委員については、ほとんど機能不全に陥っている人たちが多いので、あまりこういうことを記録に残る前で言うのは難しいのですけれど、名誉職のような状態で、それは結局、本来教育委員会制度というものが作られたのは、そういった趣旨ではなかった話だったものが、だんだんと名誉職のような状態になって、最後はテレビの前にすら出てこなくて、何か起こればみんな隠れてしまって、そして本当にあるかどうか分からないとなって、最後は教育長の権限を強めるなどという議論になってくると。それは、果たして日本の将来の教育にいいことなのかというのは、社会教育の側から見ていると、大変危機を持ちます。そうなると、佐藤さんが提案してくれた、新潟市の場合だと動ける教育委員を置いてほしいというのは、社会教育にかかわっている者としては共通の願いかなと思いました。

それから、長谷川さんのお話が大変面白くて、学校の先生をどうするかといったら、既存の価値観体系の中に入れさせるのはどうかということですけれど、これはなかなか、実は難しくて、作業

としておっしゃったのだけれども、対応できる子ども、要するに、今までの学校制度に適応できる子どもの数が減ってきて、いろいろなケアを必要とする子どもが増えてきたという状態なのですけれど、それを障がいと見るかどうかについては私は違う見識を持つのですが、とりあえず、多分言えることは、おそらく子ども社会のほうが変わってしまって、学校は変わっていないのですね。だから、ずれてしまっているのです。社会教育だったらどう見るかというと、社会教育だと、例えば講座があって、そこの講座に誰も来なければ主事はどうするか。公民館長はどうするか。その講座をぶっつぶして、いかに市民が来るかに合わせていきますよね。

ところが、学校だと、学校の教室をやめましょう、先生やめましょう、取り換えましょう、オーバーフローしましょうとはならないわけです。社会教育の側からすると、もう少し学校はきちんと生涯学習であるとか、市民であるとかという視点で検証する時代にきているのかなという気がします。だから、生涯教育活動に参加している子どもたちというのは、私もＰＴＡをやっているときに見ましたけれども、学校の中では問題だという子どもなのですが、でも地域に来るととてもいい子だったりするのです。だから、そこはまた、地域の目とは違うので、そういうところを社会教育の活動とどうやってつなげていくかということが大事で、その活動の一環に、例えば地域教育コーディネーターみたいな人に入ってきてもらってつなげられるような、そういう力があったらいいのではないかと思いました。

学校、地域教育コーディネーターの人をコミュニティコーディネーターにするという考え方については、社会教育で持っている考え方とは原理が違うので、どんなものだろうかなと思っているのですが、今みたいに学校が変遷して変わっているのだから、だから、その学校をどうやったら地域の中にもう一回、そのリズムに合わせられるようにしていくかということを、私たちは提案していく必要があるのかなと思いました。

本当だと、この後、４人を通しての議論が必要なのですが、通して、皆さんのご感想、ご意見はございませんでしょうか。どんなご質問でもけっこうでございます。

（斎藤教育次長）

今、地域教育コーディネーターをコミュニティコーディネーターにするのは違うのではないかと相庭先生がおっしゃいましたが、私が言ったのは、そういうことではありません。地域教育コーディネーターをやっておられた方が地域でそういう力を発揮されるのも、ひとつはいいのではないかということで、地域教育コーディネーターという人を、コミュニティコーディネーターという職に置き換えるというようなことではないので誤解のないようにしていただきたいです。

それと、先ほど、佐藤委員からの教育委員の担当区制というお話がありましたので少し申し上げますと、現行の教育委員会制度については、国のほうで権限と責任の明確化という観点から、見直しをするということで、今検討されているわけですけれども、今、新潟市が進めようとしているのは、現行の教育委員会制度の中で、より地域の実態を把握して、いろいろな教育課題を教育委員が把握をして、それを改善していくと。なおかつ、市全体の教育行政に活かしていくという趣旨からのものなので、いわば現行の教育委員会制度を充実させるという趣旨なので、当然、子どものために動ける、今の教育委員さんも子どものためにやっていらっしゃる方々ですし、また、担当区制になってもより一層そういう子どものために、あるいは地域のいろいろな教育課題を解決するなり、あるいは改善するなり、やっていただける方を選任するということは間違いのないところだと考えています。

（佐藤委員）

誤解があったらすみません。もちろん、今の教育委員さんは、子どものために動いてくださっているのは、重々承知しています。ただ、子どものために動いてくださったことを、どこだかの課が勝手なことをするなみたいに言われてしまうと、教育委員さんが動きにくいかなと思って。すみません。

（斎藤教育次長）

そういうことはないと思いますけれども、教育委員さんが動くためには、教育委員をサポートす

る体制は必ず必要なので、それは、今いろいろとどういう形がいいのか検討中ですが、委員を飛び越えて事務局だけ動いてしまうというのは、そもそも教育委員会制度からしても本末転倒な話なので、それはないようにきちんとしていきたいと思います。

（相庭議長）

教育委員会制度というのは今、曲がり角にきていますので、私は、新しく変えようとしている国側の動きに対しては、はっきり言って反対です。だけど、新潟市のように、今の教育委員会制度をより充実させて、具体的にできるようにしていくという方向については、全面的に賛成です。では、具体的にどうするのだという話のときの、佐藤さんが言ったみたいに、各区に置くという発想というのはいいことだと思います。そうすると、そのときに、やはり名誉職的な位置づけを取らないで、やはりきちんと動いてくれる委員の人、あるいはそういう仕事をしてくれる人を、ぜひ推薦していただきたい、選んでいただきたいというのが佐藤さんのお話だったのですね。そうすると、各区でつくれば、いろいろな区で教育関係をやっている人たちがいて、相談にのったり話をしている、そういうことができると、また違った要請が生まれてくる可能性がありますので、そういう話だったと私は理解しました。

ほかにいかがでしょうか。

（川上委員）

私は長谷川美香委員の報告の中で、人間関係をつかむために整理するには、相当な時間が必要であると。確かに、これは本当にそうだなと私も現場にいてそう思います。私たちが学校に入って、まだ７年ととるのか、もう７年ととるのか、その辺りが今後にかかっているのではないかと。確かに、社会はどんどん変化していきますけれども、でも、その人の気持ちに沿って、人の気持ちを掴んでお願いして入っていただいて、それを紡いでいくには、本当に１年や２年ではできないことだと思っていますし、７年かかってようやくということもあるので、その間の時間というのは大事にしていただきたいと思いますし、私たちが活動している、そして育ってきた子どもたちが大人になって地域に帰ってきたときに、この活動の成果というのかが出てくるのではないかと、そのように捉えていただけるとありがたいのかなと思います。

（相庭議長）

川上委員の発言と同じようなことが神戸から出たのです。紡いでいくのはかかるのだと。５年、10年単位で見ていかなければいけないと。それに対して、どちらかというと、学校教育的な発想だと早く出せということなのです。気楽に待っていられないと。これが面白かったです。要するに、おっしゃったとおりの結論でした。今の地域の子どもたちが、５年、10年先に戻ってきたときに成果というものは出てくるのだと。社会教育も、５年、10年経って町がどうなったかというときに、この社会教育芸術点というものは評価されるのではないでしょうかということが出ていました。

（長谷川（克）委員）

余談で言わせていただくと、附属の図書館ボランティアは、小学校は６年間という長めの在学期間も助けとなり現役保護者だけで運営できているのですが、中学校は在学期間が３年と短いため、保護者ＯＧが主体的に活動している状況です。仕組みとしては、ＰＴＡを終えた保護者に、先輩の保護者からボランティアへのお声掛けをして人材をつなぐように考えていました。先生の協力という面でも、子どもの在学中に学校にいた先生が転勤して、２～３年で戻って来て、ボランティアとのコミュニケーション・連携も保たれると考えていました。しかし、ボランティア組織の設立から、６～７年経ってくると、ボランティア人材の入れ替わりはほとんどなく、ＰＴＡ人材との関係は希薄化、先生とのコミュニケーションも大部分の先生が入れ替わったことにより希薄になっていました。在学３年の中学校組織では、ボランティア人材がずっと同じで、学校とのコミュニケーションが希薄になると、図書館運営活動がルーティン化してしまい、司書のいない教育のための図書館としての機能に不安を感じる面も見えてきました。先般、このボランティアの方々とは、次の世代につながる人材への引き継ぎをテーマにした懇談をしていたところです。１～２年下の人材に声かけをして、一遍に変わるのではなくて徐々に世代交代をしていく仕組みを意識しないといけないとい

うことになりました。この組織を立ち上げた先輩ボランティアは、自分たちが苦労しても、後輩の次世代ボランティアに居続けてもらうために、その負荷を軽減させるような配慮も見受けられました。組織としては、「今やっていることが、次の人たちでできなくなる」から、後輩に大変なことも継承させる仕組みを考えてくださいというのが、この前の懇談した締めくくりでした。人が徐々に変わる中で、機能やネットワークを残すというのは、ひとつの仕組み・一人の頑張りでは難しいということをあらためて思いました。初代ボランティアの皆さんは、ものすごくエネルギーが高く、ここまで継続してきましたが、これからは、後継者を意識しながらのボランティア活動も考慮していただけるものと期待しているところです。

（相庭議長）

ありがとうございました。もう時間になってしまいましたので、以上でこのテーマについては打ち切りたいと思います。活発なご議論、ありがとうございました。

５．その他

何か、連絡事項等ございませんでしょうか。

では、以上で協議・報告を終了しましたので、事務局、よろしくお願いいたします。

６．閉会

（事務局）

本日、長時間にわたり、いつもにも増して熱心なご審議、ありがとうございました。以上をもちまして、第30期社会教育委員会議第６回を終了いたします。

なお、研修等につきまして、また個別に打診をいたしますので、ぜひご協力をよろしくお願いいたします。

次回は、８月27日（火）の14時からですけれども、会場が変わりまして本館会議室となります。本日はご苦労さまでした。